

風こぬり

三浦綾子



新潮文庫

かえ 帰 り こ ぬ 風 かぜ

新潮文庫

み - 8 - 8



昭和五十八年三月二十五日 発行
昭和六十二年八月十日 十六刷

著 者 三 浦 綾 子

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便 番号 一 六 二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六六―五一
編集部(〇三)二六六―五四〇

振替 東京四―八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、二面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・加藤製本株式会社

© Ayako Miura 1972 Printed in Japan

新 潮 文 庫

帰 り こ ぬ 風

三 浦 綾 子 著

歸
り
こ
ぬ
風

序　　章

一月十七日　土曜　晴　風強し

今日はなぜか、一日淋しかった。淋しさとは一体何なのだろう。何がわたしを淋しがらせるのだろう。原因のない淋しさというものは、へんに不安なものだ。

夕方、勤務が終って帰る時、急に広川さんの顔を見たくなくて、二号病室に寄ってみた。「千香ちゃん。どうしました？　淋しい顔をして」

広川さんは、書見器を横にまわして、わたしの顔をじっと見た。ああ、わたしは人にもわかるほど、淋しい顔をしていたのだ。

広川さんはたしか二十八歳だから、わたしより六つ年上のはずだが、ずっとずっと年上のような感じだ。何となく、人の心を安らがせるふしぎなふんいき霧囲気を持っているからだろうか。

「何を読んでいたの」

わたしは広川さんの書見器をのぞきこんだ。

「モーリヤックのパリサイ女さ」

「モーリヤックが好きなのね」

広川さんは、フランス語でモーリヤックを読んでいた。

「うん」

「パリサイ女って、なあに？」

「そうですねえ、いってみれば、自分は他の人より正しいという意識が、強すぎる女のことかな。人間はみんな、パリサイびとですよ」

広川さんのそばにいるだけで、淋しさが消えた。

「広川さん、毎日ね臥ふいて淋しいと思わない？」

広川さんは、入院してもう一年になる。慢性肝炎と慢性腎臓じんぞうえん炎なのだ。

「淋しくないと言ったら嘘になるでしょうね。でも、病気になったからって、特別健康の時より淋しいということでもないですよ」

そう言って広川さんは、手の指をポキポキと鳴らした。

「わたし、今日はへんに淋しいの。どうしてかしら」

「生きてるって、そんなものですよ。淋しい日もあれば楽しい日もある。いや、千香ちゃんの場合は恋人がいらないからかな」

広川さんはにこっと笑った。いい笑顔だ。こちらの心をときほぐし、微笑を誘う笑顔である。わたしはアンドレ・ジイドの「狭き門」を借りて帰った。民子さんは、もう準夜勤務で部屋を出ていた。

今夜は風だ。ガラス戸か時々鳴っている。

一月二十日、火曜 雪一日降りやまず

ゆうべ、うとうとと眠りかけていたら、準夜勤務を終えて帰ってきた民子さんが、いきなりわたしにとびついてきた。

「どうしたの」

思わず飛び起きると、

「千香ちゃん、わたし、とうとう加沢先生とキスしちゃった」

と、うっとりした顔をしている。

「まあ」

加沢先生は、四十を過ぎた外科医長だ。皮靴をキュッキュッと、誰よりも音たかく鳴らして廊下を歩くきぎな奴！

「民子さん、あの先生には奥さんがいるんじゃないの。外科の山田婦長とだって、ミス外科とだって、噂がある先生じゃないの。どうして、あんな先生に……」

と怒ると、民子さんは笑った。

「千香ちゃんは、まだ恋をしらないんだもの、この気持わかりはしないわ」

さくらんぼのような、つるりとした赤い唇をみつめていると、加沢先生のうすい薄情そうな唇が目につかんで腹立たしかった。

男と女って、一体何だろう。男の何に、女の何が惹かれるのだろう。わたしは清い恋をしたい。真実な恋をしたい。二度と繰返し得ない人生なのだ。悔いのない恋をしたいと思う。

娯楽室のピアノの白い鍵盤けんばんを十五、六本皿に盛って、カレーをどろりとかけ「召上れ」と加沢先生に食べさせたし。

二月一日 日曜 晴 寒さきびしい

準夜勤務。詰所で体温表の記入をしていたら、杉井田先生が入ってきた。

「あ、君が準夜なの」

なぜか先生は、ちよつと驚ろいたようにわたしの顔を見た。

「はあ、何か?……」

「いや、君の準夜とわたしの当直は、今までぶつかったことがなかったでしょう。だから……うれしかったんだ」

杉井田先生は、そういつて、てれたように笑った。わたしは思わずドキンとした。こう言われてドキンとしなければ、ヘルツが故障していることになる。

杉井田先生は、髪をはらりと額に垂らし、いつも、愁いを含んだ目をしているのが（女性の目の表現みたいだけど）魅力的だ。ちらりと見られるだけでも、胸がキュツと痛くなると、ナースたちや女の患者がさわいでいる。その先生に、こんなことを言われたということ、やっぱり素直にわたしはうれしかった。

「君のうちは、大きな食料品屋さんだつてね。ご両親とおにいさん夫婦、二番目のおにいさんは東京、店には店員さんが五人もいる……」

杉井田先生はそう言って、わたしのそばの椅子に腰かけた。いつの間にそんなことを知ったのかと驚ろくわたしに、

「君は二十二歳、趣味は読書と音楽でしょう？」

杉井田先生は、わたしの顔をのぞきこむように言った。

「まあ、そんなこと……」

「ぼくは、君に関してはいろいろと知っているよ。ただ一つ、君に恋人がいるかどうか、これだけはぼくにもわからないけど」

即座にいないと言おうとして、わたしはだまった。

こんな時に、どんな返事ができるだろう。わたしは、ごく平凡な女なのだ。これだけ自分に関心を持たれていると知っただけで、飛び上りたいほどうれしくなる、当り前の女なのだ。けれども、すぐにうれしそうな顔をするほど、無邪気でもない。わたしは多分、当惑したようにうつむいていたと思う。

「君は広川君と親しいらしいけれど……」

しばらくして、杉井田先生はポツリと言った。広川さんは恋人ではない。わたしはただ、あの人のそばにしていると、呼吸が楽になるのだ。心が安らぐのだ。でも、わたしはやはりだまっていた。杉井田先生は、何とも言えない淋しそうな目で、じっとわたしを見つめていた。

民子さんの寝息を聞きながら、ここまで書いて、わたしは何となくため息が出た。日記を書くように勧めてくれたのは広川さんだ。わたしは、今日までただ何となく書きつづけてき

た。けれども、何だか明日からは、何を書くのか恐ろしいような気がする。

恐ろしいとは何だろう。自分が恐ろしい。他人が恐ろしい。世間が恐ろしい。この恐ろしいという感情は軽薄なのだろうか。こずるいのだろうか。広川さんという人には、恐ろしいことがないような気がする。なぜだろう。

二月七日 土曜 雪

へあなたが口を開いて話すとき、そのことばは、沈黙よりも価値あるものでなければいけない

とはアラビアの格言だそうだ。沈黙は金という言葉もある。多分、猛烈なおしゃべりな奥さんを持った男が、苦しまぎれにつくった格言にちがいない。

たとえ、その言葉が神様の言葉でも、今日のわたしは、黙っていることができないのだ。二十二歳の女の子は、おしゃべりのほうがかわいいのです。

今日は病院のすぐそばの、札幌神社の裏で、恒例の職員スキー大会があつた。でもわたしは日勤で行けなかつた。大きな雪が、ふわふわ漂うように降る窓を眺めているだけだった。夕方、宿舎に帰ったら、芙佐ちゃんふさちゃんが部屋に遊びに来て言った。

「お千香、おこれよ」

芙佐ちゃんは体重六十六キロ、身長一メートル七十。男性に劣らぬ体格のせいか、男のような口をきくのだ。

「どうして？」

「だってさ、杉井田先生が西原千香子はきていなかった、あちこちで、きいていたつてうからさ」

芙佐ちゃんは、わたしの肩をぐいとおつついた。民子さんも、

「みんなさわいでいたわよ。杉井田先生と西原さんは、そういう仲だったのかとか何とかって。同室のあなたが知らないなんて、ボンヤリねって言われたわ」

などと言った。

「知らないわよ、わたしだって」

わたしが困惑したように言くと、芙佐ちゃんは、

「わかってるよ。杉井田先生が千香に熱を上げてるんだ。千香は女のわたしでさえ、ほれぼれするような、きゅっとしまった体をしてるし、情熱のないマスクをしてるもん、無理ないよ。好きなら、突進しなよ。応援するよ、ね、お千香」

芙佐ちゃんはそう言うってから、じいっと、わたしの顔を見て、

「でもね、男ってなまざるい動物だからね、気をつけるんだよ」

と言った。芙佐ちゃんはいいい人だけれど、男を全然信用していない。あとで民子さんが、彼女多分手痛い失恋をしているのよ、と言っていた。

わたしは、つくづく、スキー大会に行きたかったと思う。わたしは高校時代、スキーの選手だったのだ。スキーに乗ったわたしは、多分誰よりも魅力的な存在であったにちがいない。

ところで、わたしは、杉井田先生が好きなのだろうか。好かれたからといって、好きになるというのは、主体性がなさすぎる。あの先生のどこが好きなのだろう。あの、やや憂鬱（ゆううつ）そうなる目だろうか。誰を愛するか。これは一生の一大事なのだ。人生は撰（せん）択（たく）なのだ。誰を選ぶかは一大事なのだ。

ちよつと分別臭く、そんなことを考えてみたが無駄だった。わたしは、多分、杉井田先生が好きになったのです。

二月十五日　日曜　快晴　珍らしく風なし

日直。

春の日ざしのようなあたたかい日が、どの病室にもいっばいにさしこんでいた。医師たちはみな日曜で休み。杉井田先生も休み。

夕方、寄宿舎に帰ったら、珍らしく東京の兄からハガキが来ていた。

「ストーブのそばで、ぬくぬくと過す札幌の冬がなつかしいよ。東京の冬は寒い。千香はスキーを楽しんでいることだろう。その暇もないかな。と、ここまで書いてハッと気がついた。やつぱり逆さに書いている。この頃よくやるんだ。こんな不注意な人間でも、プログラマーが勤まるんだから、ひどいよ。捨てるのもつたいないからこのまま出す。注射をまちがえるなよ。東京はひどい流感だ。千香もカゼを引くなよ」

ふっと、次兄に会いたいと思った。きょうだいいい。三人いても、四人いても、さ

ぞいだろうな。ハガキを逆さに書いても、斜めに書いても、何でもいい。兄っでいいな。兄のハガキ一枚で楽しくなるなんて、安っぽい女でしょうか。

二月十六日　月曜　晴

「この頃、ちよつと、はなやかな噂があるわね、西原さん」

詰所にうがい薬をもらいに来た真野良枝さんが、好意ある微笑を見せながら言った。真野さんは、広川さんと家が近所とかで、親しい間柄なのだ。

「あら、そんな」

わたしは思わずあかくなった。噂って、いつもこうなのだ。本人が何も知らないうちに、話だけが大きく広がっていくのだ。

「西原さん、おいくつ？」

「二十二ですけれど、四月には三になるんです」

「二十三ねえ、わたしより十も下なのねえ」

真野さんは考えるように言って、

「結婚は急ぐことはないのよ」

と言った。どこか、広川さんに似ている人だ。広川さんと結婚したら、きつとすてきなご夫婦になるだろう。

この頃何となく、わたしはうわずっている。日記は青春の記念碑だと広川さんが言った。

日記の中で、じっくり自分を見つめなさいとも、書ってくれた。でも、わたしは自分から目を外らしたくなっている。目を外らしてふわふわしていたい。それもまた、青春の日の正直な姿なのだろうか。

二月二十八日 土曜 曇 あたたかし

五階でエレベーターに乗ると、思いがけなく、杉井田先生が一人だけ乗っていた。思わずわたしはあかくなつた。

「帰るの、西原さん」

杉井田先生の手が、背にかかった。一瞬のことだった。が、エレベーターは三階でとまった。四、五人、看護婦や患者が入ってきた。人々の視線が、わたしの上に集まるのを感じた。平気でいようとしても、たつた今、背に感じた先生の手の感触が残っていて、わたしはついうつむいていた。

地階でエレベーターを降りたら、うしろから名を呼ばれた。ふり返ると、ガウンを着た広川さんが、やさしい微笑でわたしを包んでくれた。うつむいていたので、三階で乗りこんだ広川さんにわたしは気づかなかつたのだ。

「お買物？ わたしがして上げたのに」

「うん、この頃、少し動きたいんですよ」

広川さんは、売店のほうにゆつくりと歩いて行った。

誰もいないエレベーターの中で、いきなり人の背に手をふれるなんて、失礼ではないか。わたしは、そんな男性は好きじゃない。そう思いたいのだが、今も背中に、あの先生の手がおかれているような、ふしぎな感触が残っている。

わたし自身とは別の感情、肉体の感情があるのを、わたしは今日初めて知ったような気がする。あのエレベーターで、このまま、先生と二人で地獄まで降りて行ってもよいと思うような、甘美な大胆な感情が、わたしの中にあつたような気がする。

民子さんは、夜、外出することが多くなった。時々、手鏡をじっと見つめていることがある。民子さんも、悩んでいるのだ。妻のある人などを愛してはいけないのに。

三月一日　日曜　うすぐもり　時々小雪

広川さんの病室に行く。わたしの顔を見ても、広川さんはしばらくだまっていた。

「どうしてだまってるの、広川さん」

尋ねると、

「だって千香ちゃんは、だまってそこにすわっていたんじゃないの」

広川さんは、かなしい程のやさしい微笑を見せた。その通りなのだ。わたしは、広川さんのベッドのそばに、じっとすわっているだけでよかったのだ。それにしても、広川さんって、恐ろしいほど人の心の動きのわかる人だ。

「わたしね、ゆうべ……」